

エッセイを
書きたいあなたに
木村治美



エッセイを書きたいあなたに

木村治美



著者略歴

1932年東京生まれ。東京教育大学英米文学科卒業。同大学院で文学研究科博士課程を修了。現在、共立女子大学教授。1977年、『黄昏のロンドンから』で第8回大宅壮一ノンフィクション賞を受賞。1984年から1987年まで臨時教育審議会委員を務める。

エッセイを書きたいあなたに
一九八九年十二月一日 第一刷

著者 木村治美

発行者 豊田健次

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三

電話〓〇三―二六五―一二二一

印刷所 凸版印刷

製本所 矢嶋製本

万一落丁乱丁があればお取替えします

定価はカバーに表示してあります

ISBN4-16-343880-7

© Harumi Kimura 1989 Printed in Japan

目次

1 エッセイストの誕生

はじめの一枚を書きだすまで

処女出版、そして大宅賞受賞

私の文章修業

2 エッセイって何でしょうか

3 「書くこと」の効用

4 今日もエッセイ教室では

5 文章を書くためのアドバイス

原稿用紙を前にして

111

79

61

43

34

22

9

何について書きますか

142

心に留めておきたいこと

167

6 作品を発表する舞台

身近なことから始めた人たち

199

懸賞に応募するなら

206

自分の本を出版したい

220

プロのエッセイストへの道

229

7 学びつつけるのは楽しいこと

239

あとがき

253

装
丁
本
く
に
子

エッセイを書きたいあなたに

1

エッセイストの誕生

はじめの一枚を書きだすまで

エッセイを書いてほしいと注文があり、読んでもらえるあてがある。

エッセイを書く充実感が味わえる。

子どもの頃から、なんとなく思い描いてきたのは、こういう生活ではなかったろうかと、考えているところです。これが現実になって、私はなんて運がよかったのでしょうか。

小学生のときから作文はうまくいったようです。運動神経は鈍かったし、派手な雰囲気で人气的になることもなかった私が、ただ一つ、ひとに負けないのは、作文でした。

中学・高校でも、私の書いた作文は、たいいてい模範作品としてみんなの前で読みあげられる光栄に浴しました。ある夏休みに岡山の母の実家を訪ねたときの作文は、他のクラスにまで披露され、大いに面目をほどこしました。家に持ち帰り、父と母の前で、二、三度、得意になって朗読

した記憶があります。

私が通っていた学校には、その頃、後に高名な国語学者になられたかた、詩人・俳人として名をなされたかたなど、信じられないほどすぐれた国語の先生が教鞭をとっておいでになりました。その上、文学的感受性豊かな友人と席を並べ、じつに恵まれた環境がありました。

いまにして思えば、中でも一番運がよかったと思うのは、中学一年で戦争が終わるや、それまでの重苦しさが一掃され、たちまちのうちに自由でのびやかな空気が、みちみちたことでしょう。それでも私たちの世代は、のちのちまで世界観に影響を受けるような体験はしているのです。進駐軍の指示により、教科書を黒々と墨で塗りつぶしたり、昨日までアメリカの悪口をいっていた歴史の教師が、手の平をかえたように、日本の軍国主義を誹謗するのをきかされたり。

もう一つ、いい時代であったと思うのは、まだ偏差値がはばをきかせていなかったこと。大学受験指導も、いまほど本格的ではありませんでした。

私の父はむかし小説家志望の文学青年でした。武田麟太郎という作家について、せっせと小説家の修業をしていたと母は語っています。この夢はついに実現することはありませんでした。しかし新聞記者という仕事柄、つねに原稿用紙と縁の切れない人でしたから、私は小さいときから文章を書くとはどういうことか、ほかの子よりはよく知っていたような気がします。ペンでマスを一つ一つ埋めてゆき、途中で破り捨てたり、推敲したり、朱を入れたり、なによりも、もの

を書くのはコンをつめる孤独な作業だということなど。こういった門前の小僧的背景は、人生に案外大きな意味をもつにちがいありません。野球の選手の子は野球がすべてであるような環境で育ちますし、政治家の子も、医者の子も、たぶんサラリーマンの子も、それ以外の人生は考えられないような育ち方をするのではないのでしょうか。

私がもの書きになりたいと思ったのはいくつくらいだったのか。もの書き業といえばその当時私にとっては小説家しかありませんでした。高校の一年だったか二年だったか、私は小説を書きました。それを誰に見せたらよいのかわからず、父に読んでもらったのです。父は全部に目を通さぬうちに、こういつて投げ出すように返してよしました。

「吐き気がするよ」

父はたいへん穏やかで、情にも厚く、円満な人柄のひとつでしたから、私はこの意外なことばに驚き、かつたいへん傷つきました。そのときの私の小説がどんな内容だったのか、ぜんぜんおぼえていません。たぶんいま読んだら、責臭くて、なまいきで、さぞ「吐き気」がすることでしょう。でも尊敬する父親からこういう批評をされた私のダメージは大きかった。それ以来、二度と小説を書くことができなくなったのですから。

大学生になってから、私からその話をきいた友だちは、あざけるように笑っていました。

「小説を親に見せるなんて最低ですよ。あんなものは親兄弟に見せるもんじゃない。作家の奥さんが、亭主の小説は絶対に読まないという例だつてめずらしくないですよ」

私もあとになって考えれば、見せる相手にも事欠いて、父親に見せるなんて最低でした。しかし、現代のような情報化社会ではなかったあの当時、高校生が書いた小説を、どこにどうしようがあったのでしょうか。父は小説家にはなれなかったけれど、まるきりしろうとというわけではないと、高校生の私は判断したらしいのです。

しかし、それだから、なお悪かったのです。小説家になろうとしてなれなかったことで、父自身の自尊心がひどく傷ついていただけでなく、作家を志したなんて、若気のあやまちのような、うしろめたい気持も大いにあったでしょう。それなのに、自分の娘が真似して小説なんか書こうとしているのを知れば、その思いは複雑です。思い出したくもない自分の過去、自分の古傷をさらけ出されるような気がしたことでしょう。それで、ついいつてしまった。

「吐き気がする」

父はこのことばをいうべきではなかった、いかに自分のふれられたくない過去と結びついていようと、口にするべきではなかった、と私はいまだにこだわっているのです。父の生きた年齢を越し、経験を積み、いろいろなことを客観的に受けとめ、許せるようになったいまも、私はしつこくこだわっているのです。

これをきっかけに、私は二度と小説を書くことはできなくなりました。私は娘として父に強くひかれていましたので、立ち直れないくらい大きな挫折感があったのでした。

また別のひとは、私のこの話に、父親として反応しました。

「そんなものですか。なるほど親というのは難しいものですな」

私もいま母親になっていきます。子どもたちの将来に致命傷を与えるような言動は慎もうと、ずいぶん注意はしているつもりです。何事もほめるように、ほめるようにして。でも、気づかずに悪いことをいつてしまっていないとはいきれますまい。

またあるひとは、首をかしげて、こういわれました。

「理工系の分野で挫折しても、そう傷つくということはないのに、小説家志望というのは、挫折があとを引くのは、なぜでしょうね」

居合わせた評論家が答えていわく、

「全人格がかかっているからです」

いまでは、こういうこだわりをもって小説を書くひとは少ないのでしょうか。昔は文士という特別な名称があり、文壇という、重々しいサークルもあったときいています。「文学をする」ということばには、たいへん高尚な、同時にまことにやくざな響きがあったものです。それは、なれば一流、なれなければ社会の落伍者と、極端に命運をわける稼業だったからではないでしょうか。かたぎの商売ではなかったのです。

さて、小説は二度と書けなくなった私。でも実をいうと、大学在学中に短篇を数篇は書いています。こんどは書いてることさえ父には絶対に内証で、ただなぜか文学部の友人二、三人

に読んでもらいました。そのときの作品は、吐き気がするなまいきなものではなく、現実離れしたコミカルな女の子の物語りでした。

「こういうのをもう二、三篇書いて発表したら」

と同級生のボーイフレンドがすすめてくれました。

「私の属している放送研究部で放送したいから、ちょっと貸して」

とせがんだ女子学生もいました。

「面白いわね。これシナリオ研究会でシナリオにしてみるといいんじゃないかしら」

とも。しかしなんとなく斜にかまえて、私はいずれにも応じませんでした。でも私はかれらの文学的感受性を高くかかっていましたから、その人たちが、私の書いたものを認めてくれた喜びは大きかったようです。こうして三十年以上たっても忘れないのですから。原稿は厳重に梱包してしまいこめました。さがせばまだ出てくるかもしれないね。私の小説とのかかわりはそれにて終わり。

私が小説家になれなかったのを、父のひとことのせいにはしますまい。結局、小説家としての才能はなかったのです。もしあったなら、誰になんといわれようと、デーモンみたいなものがじつとしてはいなかったでしょう。本当の個性や才能は、さえぎられればさえぎられただけ、より強く反発していくものだと思えます。

いま教育問題として、個性の尊重、個性重視が課題になっていますが、とくに周囲が育ててや